

昭和62年度

幼稚園における望ましい保育環境

～その考え方と条件について～

川崎市総合教育センター 幼児教育研修員

幼稚園における望ましい保育環境

～その考え方と条件について～

¹衣袋 一江

キーワード： 幼児教育 幼稚園 5歳児 心理的環境 物的環境 人的環境

はじめに

学校教育法第77条に「幼稚園は幼児を保育し、適当な環境を与えて、その心身の発達を助長することを目的とする」と、記されていることを引用して「幼稚園は環境による教育を行うところである」と、よくいわれている。

また、西久保礼造は、『幼児は、身の回りの環境から刺激を受けると、それまでの成長の過程で身につけてきた、自分なりの行動の仕方によって環境にかかわったり、働きかけたりします。そうすることによって何かを獲得して、自分の中に取り入れたり、自分の行動を変えたりしながら、それまでになかったものが、前からの発展として出現してくることが、発達するということなのです。』¹⁾と述べているが、このように環境の与える影響が幼児の発達に大きな影響を及ぼす、ということから考えても、幼稚園は「環境による教育」を行うところ、といえるのではないだろうか。

しかし、幼稚園において「環境」というと、まず、季節や行事にあった室内の飾りや、教材教具の準備の仕方などを思いうかべてしまう。幼児の発達を促すための「環境」としては、はたしてそれだけでよいのだろうか。

そこで、幼稚園においては、どのように保育環境を備えていったらよいか、それをどのような条件のもとに整えていったらよいか、を考えていくことにした。

1. 研究の内容

1. 保育理論の中の保育環境

(1) モンテッソーリ、倉橋惣三の保育理論から

モンテッソーリは、独特な感覚教具を使用している教育で知られているが、その保育理論には、環境による教育、という考え方が強くあらわれている。

また、「日本のフレーベル」といわれている倉橋惣三の保育理論は、現代においてもなお、幼児教育の指標とされている。〈表1〉は、両者の保育理論と、保育環境のとらえ方をまとめたものである。文献をとおして、それぞれの理論をまとめてみると、両者は、実践の仕方はまったく異っているが、その幼児観や保育環境に対する考え方に似通っている部分が多いことに気づいた。両者に共通している下記のような考え方は、非常に共感できることである。

- 幼児は本来、自ら成長していく力を持っている。
- 幼児の持っている力を充分発揮させるには、幼児に自由な環境を与えることが必要である。
- 教師は環境として非常に重要な役割を果たす。

¹ 渡田小学校付属幼稚園教諭（長期研修員）

(2) 幼児の発達を願った環境づくりをめざす幼稚園の事例

「幼児の発達を願った環境づくり」を実践している幼稚園を訪問し、その保育環境のとらえ方や、具体的な工夫点をまとめたものがく表2〉である。

逗子市のかぐのみ幼稚園は自然のままの裏山が、静岡市の静岡大学付属幼稚園は広い敷地にたくさんの樹木があり豊かな自然に恵まれていた。また、施設設備、教材教具も充実しており、園内のどこをみても保育環境づくりが工夫されていて、その中で幼児がいきいきと活動していた。さらに感心したのは、豊かで恵まれた環境を持ちながらも、両園ともに「教師」は「もっとも大切な」「もの以上に大きい」環境であると、とらえているところである。また、両園とも、全教職員の協力体制が非常にしっかりしていると感じた。その他、訪問したどの園も、それぞれ独自の保育理論を持っており、それにもとづいて保育をすすめていることに感心させられた。

また、いろいろな園を訪問しているうちに、幼児達の表情や活動の仕方に、その園らしさがあらわれていることに気づいた。なかには、上記二園のような恵まれた環境はなくても、幼児たちがいきいきとしており、活動が豊かにくり広げられている園もあった。しかし反面、恵まれた環境に囲まれていながらも、規制や制限が多いのか、幼児が型にはめられたようであり、幼児本来の活発さの感じられない園もなくなかった。

物的な環境を整備するだけでは、幼児の活発な活動を促すことにはならないように思われた。

〈表1〉

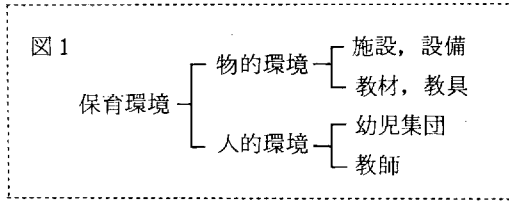
	モンテッソーリ イタリヤ (1870~1952)	金剛 昭三 (1882, M15 ~1955, S30)
保 育 環 境	<ul style="list-style-type: none"> 幼児は本来内的生命力を帯びており、<u>環境との相互作用</u>により発達していく。また、発達には意欲の時期(敏感期)があるのだから、その時に意欲の活動をさせる必要がある。 科学技術が進歩している現在は幼児の創造性を育成することが急務である。しかしそれは画一的な教育、学習者が受動的な立場にある教育では不可能である。幼児の内的生命力を発揮させるには、幼児の豊かな想像力が自由にはげられる環境が必要である。 	<ul style="list-style-type: none"> 幼児は具体的な生活の営みのなかで自ら自分を表現していく力を養っている。 幼稚園は幼児が生活し、その自己実現力を充分発揮し得る設備と、それに必要な自己の生活活動のできる場所である。 「生活を生活で生活へ」……幼児の生活を、その<u>まなごらの生活を</u>をしょうぶんさせることによってより高い生活へ導くのが、幼稚園である。
環 境 の と ら え 方	<ul style="list-style-type: none"> 幼児は自由感を持つことによって自発的になる。だから幼児の自由が保障される環境でなくてはならない。 社会や家庭はおとな中心にできており、幼児の行動を喚起しない。だから幼児に最適な環境(こどもの家)が必要なのである。そこでは幼児が主人公である。だから、すべて幼児のサイズ、発達にあったものでなくてはならない。 教師はあくまでも幼児の助力者でなくてはならない。そして、<u>豊富な態度、幼児を観察し理解する態度</u>を持ち、<u>朗明、静謐で高い教養</u>をもってなくてはならない。 	<ul style="list-style-type: none"> 幼児の自己実現力は適切な環境で自然に自由な発意上をもって活動しているときによく発揮される。 幼児が自己実現できるよう設備をしながら、その設備を役立てていく園全体の態度が、<u>幼児に自由感を許すもの</u>でなければならない。 幼稚園は、教師が自ら幼児に接する前に、設備によって幼児の生活を発展させることである。 教師は力みすぎて幼児をひきずり回すようであってはならない。自己実現しようとしている幼児を<u>助け指導する</u>のである。 教師は幼児の中にはいりきっていないなければならない。そのためには、<u>幼児より前に生活していなければならない</u>。

〈表2〉

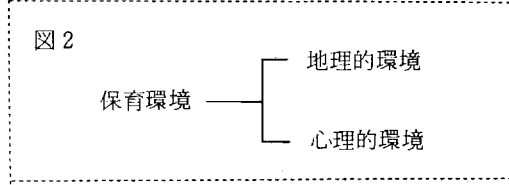
	私立 かぐのみ幼稚園 逗子市	国立 静岡大学付属幼稚園 静岡市
保 育 環 境 の と ら え 方	<ul style="list-style-type: none"> 学年、クラスはなく、地域別異年齢集団を単位とするかぐのみ式オープン保育を行う 大人や保育者が一方的に教へ、考える、画一的な保育はしない 常に一人一人の幼児を見守り、自らの興味、欲求に応じて活動できるような環境作りを工夫していく 生命の尊さ、生きる喜び、恐しみなどの感動体験ができるよう、自然環境を鑑え、動物、植物を育てていく 園内よりも園外を多く使う。そして高山や地域の環境(川、海、公園)も保育の場と考える 教師はもっとも大切な教育的環境である 教師は、地域指導、保護指導などにおかれ、組織化され、ローテーションを組む、協力して全職員が全園児の指導をする 	<ul style="list-style-type: none"> 自立をめざして(健康)、自発的に(学習意欲)心を選ばせながら(社会性)の三点を教育目標とし、幼児みずから着心も叫れられと遊べる幼稚園をめざす 幼児をとりまく環境の実化から、今の幼児に必要な環境は何かを鑑え、幼児が自分の生活の場として安心して過ごせるような空間づくりにとりくんだ 年齢やクラスにこだわらず、自然に交流しあうようにし、クラスの半数が一日おきに登園するようなこともとり入れ、ゆったりとして、和やかな雰囲気づくりをする 教師のあり方が、もの以上に大きい存在である、と考える 担任だけでなく、全職員が、また父母を含め園内で働く人々すべてが、幼児を育てる人的環境であると、とらえている
具 体 的 な 工 夫 点	<ul style="list-style-type: none"> 園庭の固定遊具はいろいろな素材と組合せたり、ユニークな設置の仕方をして、工夫してつかわっている ありとあらゆる自然物、廃材(丸太、段、こわれた電気器具、壊れた風呂、瓦罐、ダンボール等)が豊富に用意されている 本物の(大人用の)道具がたくさん用意されている(ベンチ、スパン、ドライバー、のこぎり等) 自然をそのままのこした高山を選び場として利用している 	<ul style="list-style-type: none"> 園庭のどこにいても室内が、室内のどこにいても園庭が、またもうひとつつむこの庭がみとおせるように設計されている 段、瓦礫ともに豊富な樹木、自然の川、園庭に山のように積みあげられた砂の山等、自然にふれる場が多く、その配置も工夫されている 園内、園外とも広いスペースがありながら、すみっこや、高いところを選びたがる幼児のための小さなコーナーが随所に設けられている 自転車、三輪車、ローラースケート、リヤカー、積車を乗り回せるコンクリートロードがある

2. 幼稚園における保育環境


ここまで、いろいろな保育環境の考え方を学んできたが、では実際に幼稚園においては、どのように保育環境を整えていったらよいのだろうか。「環境」を広辞苑でひくと、「人間または生物をとりまき、それと相互作用を及ぼしあうもの」となっている。保育環境を、それにあてはめて考えてみると、教材教具などの物的なものだけでなく、友達や教師などの幼児をとりまく人的なものも考えていかななくてはならないだろう。そこで、保育環境を図1のように分類し、各項目ごとに望ましい条件を考えていこうとした。



しかし、この分類の仕方では、何か足りないものがあるように思えた。訪問した園の中に、施設設備がすばらしく、教材教具も豊富で、幼児のクラス、学年編成や教師の配置も理想的であるにもかかわらず、幼児が本来の幼児らしさをいきいきと発揮して環境にかかわっていないような園があったことを考えた時、上記のように分類して条件を整えただけでは望ましい保育



環境とはいえないのではないか、と考えるようになった。では、図1の分類以外に何が必要なのだろうか。そのように考えた時、秋山和夫が違った観点で保育環境を分類している文献に出会った。秋山は、図2のように分類したが、地理的環境とは、『園舎、園庭の様子、遊具などの配置の状態など、園における物理的環境全体』²⁾のことである。また、心理的環境とは『子供の属する集団の雰囲気、すなわち、子供が安定して楽しく生活できるような人間関係があるか、といったこと』²⁾としている。そして『子供が自主的に活動することが保育者によって支持されるような環境と、そうでない環境とでは子供の活動の仕方が大きく変わる』²⁾とし、幼児にとって心理的な環境を考えていくことの重要性を述べている。このように考えてくると、物的環境がすばらしいのに幼児がいきいきと活動していなかった幼稚園は、その雰囲気の中に、幼児がいきいきとした行動を起こせるような心理的環境が足りなかった、ということになる。

幼児は環境と相互作用することによって発達していくのだから、図3幼稚園の雰囲気をもつと思われる。すなわち、幼稚園において保育環境を考える時は、図3の  部分にあたる、空気のような目に見えないもの、幼児にとって心野的な環境というべき条件が、重要な意義をもつのである。



そこで、これから望ましい保育環境の条件をさぐっていくにあたっては、まず幼児にとって心理的な環境がどうあるべきかを考え、次に、そのような心理的環境をつくりだしていくための物的環境と人的環境（教師）の条件を考えていくことにした。

3. 望ましい保育環境の条件

(1) 心理的環境

では、幼稚園は幼児にとって、どのような心理的環境を与えなくてはならないのだろうか。その

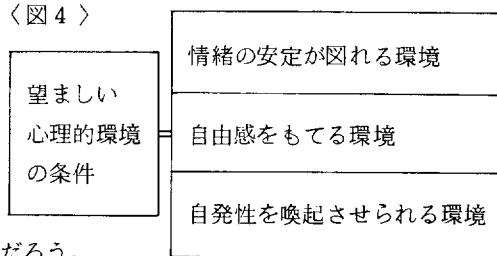
ことは当然、幼稚園でどのような教育を行うのか、という考え方によって違ってくる。たとえば、幼児は何も知らないのだから、すべて教えこまなくてはならないと考え、教師の指示通りの画一的教育を行う、とするのなら、幼児はその環境を「自由が許されないところ」「教師に与えられたもの以外には興味はしめせないところ」と、とらえるだろう。

しかし、モンテッソーリや倉橋のみでなく、多くの教育学者が、幼児は本来自ら成長していこうとする力をもっている、としているし、幼児は聞きたがりや、知りたがりやで、何んにでも興味を持ち、おもしろいと思ったことには夢中で取り組んでいくものである、ということは教師なら誰でも経験的に知っている。幼稚園は幼児が、その自ら成長していこうとする力を十分に発揮できる場所でなくてはならないだろう。

倉橋はその保育理論のなかで、幼児に「さながらの生活」をさせることが必要、としている。それは、幼児がはじめての集団生活の場である幼稚園を、自分の生活の一部ととらえ、ありのままの自分が出せる所にしなくてはならない、という意味だろう。幼稚園は幼児にとって居心地のよい所、安心してすごせる所、情緒の安定ばはかれる環境であることが必要ということである。

また、モンテッソーリは「子どもは本来内的生命力を持っているが、それは彼らが真に自由であるときにこそ発揮される」と述べている。画一的で規制の多い環境ではなく、身も心も解放され、幼児が自由感をもつ環境でこそ、思う存分自己（図4）を発揮して環境とかかわっていきける。

また、幼児は『身のまわりの環境からたえず刺激をうけ、自分の力で取り組み、そして何かを得ながら自分を高めていく』³⁾のだから、幼児がおおいに刺激され、自発性を喚起させられるような環境でこそ、望ましい発達をとげていこう。



(2) 物的環境

① 情緒の安定が図れる物的環境

訪問したある園で、テラスの柵や室内の床、幼児用ロッカー等が色とりどりに塗り分けられていた。一瞬あざやかできれいだと思ったが、しばらくするとどうも落ち着かない。けばけばしく感じるのである。それでなくても色とりどりの服を着た幼児がおり、色彩豊かな幼児の作品が掲示されているのである。『子どもが活動し、本当に育っていく場として園を考えた場合、きれいなもの、かわいらしいものは不要ではないか』⁴⁾と私も思う。幼児が幼稚園で情緒を安定させるには、外見적인見ばえをねらったようなものでなく、素朴で自然のぬくもりの感じられるもののほうがよいのではないだろうか。また、幼児が「気をつけて使わなくては」「こわしてはたいへん」と思うようなものでなく、抵抗感のない、幼児になじみやすいものが必要と思われる。

② 自由感をもてる物的環境

モンテッソーリは、大人の基準で設けられたものでは、幼児は自由に行動できないとして、ローマの「子どもの家」には、幼児の成長発達にみあったものをおもちゃでなく本物で作り用意した。やはり、サイズがちょうどよかったり、扱いやすいものであれば、幼児はそれが自分にとっての環境であることを感じとり、自由にそれにかかわれるのではないだろうか。幼児が自由感をもつためには、身体、思考、遊び方等、幼児の発達特性にそったものが必要であるだろう。そして、それらのものは安全性が十分に考慮されたものでなくてはならないと思う。

③ 自発性を喚起させられる物的環境

幼児は環境から刺激をうけて行動を起こすというが、では幼児に「よし、やってみよう」という気持ちをおこさせるには、どのようなものが必要であろうか。その時の幼児の力に、はるか及ばないようなものではもちろんだめであろう。しかし、本来なんでもやりたがり、新しいものにとびついていき、想像力豊かなのが幼児である。適度な困難性があり、新奇性があり、多様な使い方ができるものがあれば「やってみよう」という気持ちをおおいにかきたてるのではないだろうか。そして、幼児の働きかけに対して応答性があり、彼らにつくりだしていくことの喜びを味わわせられるようなものがあれば、さらに自分に必要な環境を考え出し、自ら環境づくりにとりくんでいくようになるのではないだろうか。

(3) 人的環境

① 幼児の情緒の安定をはかる教師

まず、一人一人の幼児のありのままを受け入れ、心のつながりをもつことが必要であろう。『保育者と幼児の心のつながりが基盤となって幼児たちは保育者から安心して離れ、周囲の環境に働きかける』⁵⁾のである。自分の欲求を察知してくれる人、それに応じてくれる人がいれば、情緒は安定するのではないか。また、はじめての集団生活のため友達関係で不安定になる幼児もいる。一人一人に応じた指導していくことが必要であろう。そして、幼児同士の間人間関係に配慮し、幼児達が社会性を身につけ、お互いに育ちあっているようにしたいものである。そして、教師によって幼児の行動に対する価値基準が違わないように、また、その幼児のいろいろなよいところを認めるように全教師が一致協力していくことも、幼児の情緒を安定させるために必要なことであるといえる。

② 幼児に自由感をもたせる教師

まず、幼児とはどのような発達特性をもっているものなのかを熟知し、それに応じた物的環境を整えていくこと、そして、幼児の発達課題を理解し、必要以上の規制や制限をしないことがあげられる。そして幼児が自由感をもつてのびのびと活動できるようにするため、安全面に充分配慮しておく必要がある。むやみに規制や制限をして、安全が確保されると考えることは必ずしも正しいことではない。それよりも教師が、園内のどこに何があり、それは、いつどのような使われ方をするもので、その位置によって幼児がどのように異なった行動をとるものなのかを、しっかり把握しておくことが、幼児の安全確保のために必要なことなのである。

③ 幼児の自発性を喚起させる教師

まず、現実の幼児が、今どのような発達の段階にいるのか、発達にともない周囲の環境（友達関係を含め）とどのようなかかわり方をしているのか、をしっかりと観察し、把握しておくこと。そしてそれに応じて物的環境を変化させ、生活の情性に流れるのを防いだり、友達のことに気づかせたりすることが、幼児の「よし、やってみよう」という気持ちを起こさせることにつながる。

また、どんな物でも教材になり得るのが幼稚園の特性といえる幼児が「わっ!!おもしろい」と、とびつくような物を教材として用いるためには、広い視野、発想を転換させられる柔軟性、今ある物を限られた条件のなかで工夫していく創造力などが、幼児の自発性を喚起する物を整えるのに必要な教師の条件と思われる。そして、幼児自身が自分に必要な環境を考え出し、自ら環境づくりに取り組んでいくようにするためには、教師は、なにかからなまでにあらかじめ準備してそれを一方的に与えるのではなく、幼児とともに園生活を楽しみ、そのなかからともに環境をつくりだしていくとする態度が必要となつてこよう。

Ⅱ. 研究のまとめ

「やはり、なんといっても先生ですよ」という、ある園長先生のことばが今も鮮やかに思い出される。「僕は保育のことはよくわからない。僕がやれるのは子供たちにいい環境をつくってやることだけなんです」と話しながら園内を案内して下さったときに、言われたのが冒頭のことばである。どんなにすばらしい環境であっても、それを生かすのは教師であることを改めて考えさせられたのである。その園長先生は幼児達とコマまわしをして遊んでいたが、そこには、自分は教師なんだ、指導してやっているんだ、という権威的なものは感じられず、幼児達と人間同士のつきあいをして生活を楽しんでいる姿がみうけられた。そんな園長先生がつくった環境は、どこをみても幼児が大喜びして遊び、または挑戦したくなるようなものばかりであった。この園を訪問したことにより、『環境は外にある現象なのではなく、保育者の保育観子ども観によってつくり出されるものであり、むしろ保育者の内にあるもの』⁶⁾ということばが、理解できたような思いであった。

ここでいろいろとあげてきた保育環境の条件は、今後幼稚園において積極的にとり入れていきたいと思う。

しかし、なによりも『保育者自身が環境である』⁷⁾ということをも自覚し、保育観子ども観をしっかり持ち、それを実現していくための環境をつくりだしていくこととする意欲をもっていることこそ、望ましい保育環境として必要なことではないか、と思うのである。

おわりに

この一年間「保育環境」を主題として、文献ならびに保育実践の場で調査研究を行ってみた。その結果、改めて幼児教育をみなおすことができ、教師の役割の重要性も再認識することができた。

ところで現代は、社会環境が大きく変化し、子ども達が家庭や地域社会で日常的に触れてきた環境が失われつつあり、それにともなう子ども達の問題行動も浮き彫りにされてきている。幼稚園は幼児の成長していく環境のごく一部にしかすぎないが、今後は、子ども達をとりまく世界、すなわち家庭や地域との関連の中で、保育環境を構造的にとらえることが重要な課題になってこよう。

これからは、子ども達が生活する環境のすべてをみつめ、広い視野にたった、より望ましい保育環境づくりを考え、よりよい教師になるよう努力していきたい。

この研修期間中、心暖まる御指導、御助言をいただきました総合教育センターの先生方、ならびに渡田小学校付属幼稚園の先生方に、深く感謝しますとともに、心より御礼申し上げます。

○引用文献

- 1) 西久保礼造他『幼児の発達と保育実践』ぎょうせい 1978年 8P
- 2), 3) 秋山和夫他『幼児と保育環境をつくる』ひかりのくに 1981年 9P, 6P
- 4), 6), 7) 平井信義『環境を見る目』教育出版 1974年 45P, 52P, 22P
- 5) 西久保礼造『保育過程の心理学』教育出版 1980年 167P

○指導助言者

川崎市総合教育センター第3研究室長

村 井 守

川崎市総合教育センター指導主事

高 橋 庸 之